# Seven Fighters

corplash

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｅｖｅｎ　Ｆｉｇｈｔｅｒｓ

【Ｎコード】
Ｎ７５８３Ｘ

【作者名】
ｃｏｒｐｌａｓｈ

【あらすじ】
七賢人――。それは、この桜ヶ丘の中枢部を形作る隠れた者たち。
眠れる二頭獅子、ファイバースパイ、惑いの青蝶、企業の統率者、汚物の清掃人、そして、黄眼の忍び屋。
この七賢人たちが起こされたとされる、伝説の一夜は、いまだに忘れられることはないだろう。そう、あの土曜日の夜の祭りのことは――。

原作とは全く設定が違います。キャラ崩壊などに抵抗のある方は、バックすることをおすすめします。

## #1　「その者たち、何者」

とある日曜日。彼女たちは桜ヶ丘の外れにある、とある大きな屋敷に足を運んだ。風格のある作りと、純和風の引き戸。そこをくぐると、めいっぱいの舎弟たちが声を上げる。

「お帰りなさいやし！　お嬢！！」

「うん、ただいま」

そう言って引き戸をくぐるのは、桜ヶ丘女子高等学校3年、軽音楽部所属の平沢　唯。

「憂は帰ってきてる？」

「へぃ！　憂お嬢は5分ほど前に帰宅され、今は買出しに」

「そう、分かった」

「それより、お嬢」

「ん？」

「先程、親っさんが呼んでましたぜ」

「おじいちゃんが？」

「へぇ…。親っさんいわく、話があるとか……」

「そう…。私、着替えるね」

「へぃ！　失礼しやした！」

外に出たのを確認して、私は黒地に花柄をまとった和服に着替えた。そしておじいちゃんの待つ和室へ。

「おじいちゃん…」

「おぉ、唯か。入りなさい」

「失礼します」

引き戸を引いて中に入ると、紺色の浴衣を着てあぐらをかいているおじいちゃんと目が合う。そう、私のおじいちゃんの職業は……

極道なのです。

そして私は、おじいちゃん率いる平沢組の末子。そして憂も末子。
「タカから聞いたか…？」
「いえ、ただ話があると…」
「うむ、そうか…」
「はい。で、その話というのは…？」
「うむ…。唯は、山中組を知っとるか？」
「あぁ、祭りの後から妙に動かなくなった……」
「うむ。その山中組が、ついに再始動を始めたらしい」
「はぁ…」
「山中組は、わしら平沢組とは唯一敵対する族じゃ。外回りの時には、十分気をつけよ」
「はい」
「お、そうそう。この件、憂にも伝えておいてくれ」
「御意」
そう言うと、私はおじいちゃんのいる間から足を退けた。もうそろそろ、憂が帰ってきているのではないだろうか。私はおじいちゃんの御座から退いたあと、自室に戻る途中にある台所を覗いた。
「あ、お姉ちゃん帰ってたの？　おかえり」
「うん。ただいま」
ほらね。
「あ、そうそう。おじいちゃんがね…」

◇―◇―◇

私が家に帰って一番最初にすることと言えば、ノートパソコンを起動させることだ。
Ａ．Ｍ．　Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ　Ｃｅｎｔｅｒ
そう表示されているページから、パスワードを入力して、管理人ペ

ージに飛ぶ。
Ａ．Ｍ．　Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ　Ｃｅｎｔｅｒとは、私…もとい秋山　澪が開いている、情報交換サイトだ。
管理人である私は、Ａ．Ｍ．Ｉ．Ｃ．と略している。通称『アミック』。
　このサイトはユーザー制で、利用するには会員登録が必要だ。ユーザーそれぞれにアルファベットと数字を織り交ぜた５桁のパスワードが配布されていて、そのパスワードを用いてアミックを利用することができる。主な利用方法は、掲示板とチャット。ニュースで取り上げられている事柄から身の回りの小さな出来事まで様々だ。管理人である私の携帯電話には、掲示板の記事に更新情報があるたびにそれが通知されるシステムだ。最初は少なかった会員も、今となっては５０万を超すマンモスサイトだ。
「はぁ…。今日も興味のある記事はないなぁ…」
そうつぶやいて、私はパソコンの電源を落とした。

◇―◇―◇

「ただいまー」
「おかえりー、姉ちゃん」
「あ、悪い聡。ちょっと出かけてくるわ」
　私の名前は、田井中　律。桜ヶ丘女子高等学校に通う、軽音楽部所属のドラム担当。帰ってきたのはいいけれど、私はさっそくいかなければいけないところがある。
「今日もなのか？」
「あぁ。悪いけど飯頼むわ」
「分かった」
聡の返事を最後まで聞かず、私は自室に着替えに入った。
　白い生地に赤い刺繍で『恩那組』の文字。『おんなぐみ』と読む。これは私が着ている特攻服。そう。

私は恩那組の今季総長であり、初代総長であり、恩那組は関東を統一したはじめてのレディース。私は桜ヶ丘神社の境内に急いだ。

◆

「姐さん！」
「おう」
「姐さん、チッス！」
「おう」
私が挨拶したこの2人は、恩那組の幹部。いわば中核をなす2人だ。名は、今井（いまい）　薫（かおる）と藤崎（ふじさき）　楓（かえで）。私の忠実な部下だ。
「姉さん、今日の総会は？」
「あぁ。ある情報をつかんだんでな。そのことについてちょっと」
「ある情報？」
「あぁ。」
「私ら以外の七賢人（しちけんじん）についてだ」
「！！！」
2人ともハッとした顔つきをした。こいつらはいつ見ても飽きない。
「だから、総会での情報は内密に頼む」
「…はい」
「了解です…」
そう。私の組織するレディースは、ただの不良のあつまりではない。社会情勢も事細かに調べるスパイでもあるのだ。

◇―◇―◇

「そして我が社のプロデュースする製品は……」
私は琴吹　紬。桜ヶ丘女子高等学校に通う、女子高生。そして、世界の3／4を掌握する琴吹コーポレーションの社長令嬢。
私は今、会社が契約している子会社の新製品についての会議に出

席中。正直、つまらない。
（……この製品、当たらないわね。正直何言ってるかわからないし、用途が見当たらない…。捨て…ね）

ガタンッ

「！！」
「ど…どうされました？」
「我が社は、この製品を取り扱うことはできません」
「？！　…な、なぜ今更そのような」
「貴社の開発するその新製品には、メリットが見当たりませんわ。それに、その製品は既に我が社が開発したものの模倣品。今までの説明を聞く限りでは、まだ我が社の製品の方が優れていると思いますが」
「っ…しかし、我が社の製品は軽量化に成功しており……」
「その代償として性能が下がっているのでは？　性能がそのままに、軽量化に成功したなら我が社も考えましたが……。プラマイゼロなら、扱う必要はありませんわ。斉藤」
「はっ」
「お父様に連絡して。帰るわよ」
「御意」

◆

「ねぇ、斉藤」
「なんでしょうか、お嬢様」
「私はこのままでいいのかしら？」
「と、いいますと？」
「私は確かに琴吹コーポレーションの社長令嬢だわ。でも、現社長はお父様なのだから、私に任されるのは荷が重い気がするの」

「ですがお嬢様。あなたの予想は今まで外れたことはございません。心配なされなくとも、大丈夫でございます」
「本当にそうかしら…」
「はい」
「そう…（……退屈だわ）」

◇―◇―◇

私は今、商店街にいる。買い物のためではない。喧嘩を売るためだ。

ドンッ

「おい、姉ちゃん。謝れよ」
「……」
「謝れっつってんだろ！」グイッ

ガシッ

「！！！！」
「…ぶつかってきたのはそっちでしょう」
「何ぃ！？　どういう意味だ！」
「そのまんまの意味ですよ……」ギリギリ
「い…いててて！！」
「まったく…。自分の罪を認めないなんて……」
「う…うるせぇ！」ブォンッ　スカッ
「ふぅ…。弱いんですね…」
「やかましい！！」ブォンッ　スカッ
「当たってませんよ？」
「くそっ！　くそっ！　くそっ！！」ブォンッ　ブォンッ　ブォンッ　スカッ　スカッ　スカッ

「野郎…ちょこまかと動きやがって……」
「あなたが遅いんですよ…」シュッ
「ぐっ…」バキッ
「こんなことでムキになって……」ドカッ
「ぐあぁ…」バタ…
「……恥ずかしくないんですかねぇ…」
掃除、完了。キャップを深くかぶり直し、大きなため息を一つつく。
「ま…待て……」
「…まだ何か？」
「お前…七賢人か？」
「……私は名乗る主義ではないのですが」
「ち、違うのか…？」
「…汚物の清掃人……と言った所でしょうか」
「お前、やっぱり…」
「えぇ…」

「七賢人の1人ですよ？」ニヤ

## #2　「過去の大事件」

七賢人。それは、この桜ヶ丘の中枢部を形作る隠れた者たち。
眠れる二頭獅子（ケンタウロス）、ファイバースパイ、惑いの青蝶（モルフォン）、企業の統率者、汚物の清掃人、そして、黄眼の忍び屋。
この七賢人たちが起したとされる伝説の一夜は、いまだに忘れられることはないだろう。そう、あの土曜日の夜の祭りのことは――。

土曜日（サタデーナイトフィーバー）の夜の祭り――――。
その名のとおり、事件が起きたのは土曜日の夜だった。
裏社会のドンと言われた平沢組は、概ね法律に触れてしまう方法で活動資金は得ていない。七賢人の１人である企業の統率者…もとい琴吹　紬嬢の手助けの下、（株）Ｈｉｒａｓａｗａ　Ｓｙｓｔｅｍ　Ｃｏｍｐａｎｙ、略してＨ．Ｓ．Ｃ．を立ち上げ、ＩＴ関係の会社を成長させてきた。会社を続けるにあたっては、ほかの会社の新製品や優品を仕入れなければならないのだが、Ｈ．Ｓ．Ｃ．は琴吹コーポレーションの管轄。製品を導入するかどうかは、紬嬢の判断に任せてあったのだ。
そしてある時、紬嬢はとある製品の導入を拒否。それはＨ．Ｓ．Ｃ．にとっては利益であった。しかし製品を作った側からすれば、それは害悪でしかなかったのだ。さらにその製品を作った子会社は、平沢組に唯一反発するヤクザ、山中組の傘下であり、山中組の管轄だったのである。
会社の恨みを買った琴吹コーポレーションは、対策のために警備を強化。しかし、連絡を受けたのであろう山中組は琴吹コーポレーションを襲撃。その噂を聞きつけた平沢組は、恩人である琴吹コーポレーションを助けるために動いた。その際最も異を放っていたのは、平沢組の末子であり、眠れる二頭獅子（ケンタウロス）である平沢　唯とその妹、

憂であった。
「オヤジさん、狙うところ間違えてない？」
「そうかい？　こちとら借金を抱えちまったんだ。これくらいの損害は覚悟してもらわないとな」
「損害？　覚悟？　…笑わせるねぇ」
「この琴吹コーポレーションの敷地は、恩人といえど平沢組のシマ…。何人の領地に土足で踏み上がってんの？」
「そうですよ。玄関を上がるときには靴を脱ぐ。これは日本の常識です。それでも泥を塗ろうというなら、私たちが黙っていない……」
「へっ！　二頭獅子かなんだか知らねぇが、ワシは負けんぞ！！野郎ども！　行けぇぇ！！！」
その後ろに控えた、１００を超える山中組の舎弟を、頭は躊躇なく二頭獅子にぶつけた。しかしその大量の人数を相手から向けれても、2頭の獅子はびくともしなかった。
　大量の獲物を前に、次々とその獲物を仕留めていく2頭の獅子。仕留められた獲物は、そこらじゅうに積み重なっている。そのうち、紬嬢を狙うモノがいた。
「その首もらったぁぁ！！」
「お嬢様！　お下がりください！！」
「斉藤！！！」
その男がもっていた太刀が、紬嬢の執事、もとい斉藤の頭上に、刃物が振りかざされた。
「斉藤――！！」
紬の顔に絶望の色が見えたその時だった。何者かによって、その怪しい光を放つ腕が止まった。
「！！」
紬はたいそう驚き、その腕から伸びるもう一つの腕を目で追った。
「紬お嬢の身内に手を出そうなんざ……」
そこには唯がいた。しかし。
「大した頭してるねぇ…！！」

その顔は獅子そのものであった。まさに今獲物を捉えんとする、眼光の鋭いライオン。
「さぁ、早く逃げて！！」
「で、でも！！」
「いいから！　ここは私たちに任せて…！！」
「末子殿の言うとおりでございます！　お嬢様、お早く！」
「…分かったわ！　いそいで車を回すのよ！！」
「御意…！」
紬が斎藤に抱えられて車に逃げる間も、あの二頭獅子は容赦なく獲物を噛み切っていた。そう、その姿はまるで、獲物を捉えた百獣の王そのもの。
「斉藤…」
「はっ…」
「今私が見てるのは、錯覚かしら…」
「いえ。私もこの目でしかと、見届けております」
「あなたにも見えるのね……？」
「はい。私にもしっかり見えております。眠れる二頭獅子が――」

資料によって残っているのはこの部分のみで、他のファイバースパイや惑いの青蝶、汚物の清掃人、黄眼の忍び屋がどのように関与し、どのように暗躍していたのかは定かではない。ただ、七賢人全体が引き起こした事件という記述のみが残っており、これはいうなれば『桜が丘闇の伝説』なのであった。

## #3　「信頼するところ」

祭りがあった当時から、唯と憂はとある情報屋を行きつけとして利用していた。その名も『Ｎ．Ｍ．　Ｆａｒｍ』。様々な資料が棚に整頓されており、社員は社長が信じる１人のみ。
「またいらしたんですか、末子殿」
鈴木　純である。
「私たちが一番信じてる情報屋だからね」
「それはそれは。嬉しいですね」
そう言って純は、コーヒーを差し出した。唯や憂が最も信用している、情報の多さと正確さが売りのスパイ。スパイとは言っても、人を殺すわけではない。
　この会社の所有者は、情報を集めるだけ集め、その情報を利用して七賢人までも手のひらで踊らすほどの悪徳……いや、利己的な人物。
「…って紹介したらよかったかな？」
なんとも言えない絶妙な笑顔をこちらにむける唯。何を企んでるのか一向にわからない。
「――和ちゃん」
その柔らかな声に、一瞬蕩けそうになるも、なんとか持ちこたえる。
「別に手のひらで躍らせてるわけじゃないわよ。ただ、コマの動きを観察しているだけ…」
その言葉を聞いてもなお、唯はただただ笑顔でいるばかりだ。
「それはそうと、例の情報は？」
「例…？　あぁ、七賢人ね」
「うん。存在は知ってたけど、詳しいところまではわからないんだよ」
「七賢人って言うからには、７人いるんですか？」
「そうよ。詳しくはこの書類を見て頂戴」

和はそう言うと、机上に資料を並べた。
「これは…」
「そう。七賢人をまとめてみたわ。祭りの直後から、七賢人の存在が顕著になってきたから、調べることに関してはそこまで苦労しなかったわ」
といって差し出す大量の資料。さすがは和といったところである。
「まずは貴方たち。眠れる二頭獅子よ。裏社会…もとい族社会のドンと言われる平沢組の末子。これで2人ね」
「あとの5人は？」
「3人目は、ファイバースパイよ」
「ファイバースパイ？」
「インターネットの情報網を利用して、世間の情報を集めるの。インターネットのみならず、身近な情報もチャットで交換できるようになっているわ。文明の力を利用した情報収集ゆえの正確さは、常軌を逸するものがあるわね。ま、私の情報はすべて独自のものだけどね」
その独自の情報でこの正確さ。それゆえに唯たちはこのN・M・Farmを利用している。
「そして4人目は、惑いの青蝶」
「おぉ…なんかかっこいい」
「中学校卒業と同時に、関東全域を統一した伝説のレディース、『恩那組』の総長よ」
「『恩那組』…？　あぁ、あの子ね」
唯が軽く含み笑いをしながら言う。
「お姉ちゃん、知ってるの？」
「うん、まぁね…」
「5人目は、企業の統率者。これはあなたたちも知っているでしょう？」
「うん、ムギちゃんだよね？」
「そうよ。そして6人目は、汚物の清掃人。不良を見つけ次第、有

無を言わさず暴力で撃退する七賢人の1人。そして最後の7人目は、黄眼の忍び屋…」
急に和の顔が曇る。
「これについては、まだ残念ながら分からないの」
「どうして？」
「忍び屋というだけあって、分かっていることが少なすぎるのよ」
「ふ～ん……」
「でも、その七賢人がなぜ…？」
「それはね――」
コーヒーをすすったあと、和ちゃんは静かに口を開いた。
「これが関係していたのよ」
そうやって指を指したのは、企業の統率者を示すチェスのクイーンの白駒。
「ムギちゃん？」
「紬さんが、どうかしたんですか？」
「ムギは他会社の製品の採用を断ったの。でもその製品を作ったのは、山中組の子会社だったわけ。琴吹コーポレーションを逆恨みして、貴社を襲撃。そこから祭りにつながったのよ」
「なるほどねぇ…。で、七賢人が誰なのかはまだわかってないの？」
「残念ながら、埋まっているのは眠れる二頭獅子と企業の統率者だけよ」
「私たちと、紬さん……ってことですよね？」
「えぇ」
「もっとも、貴方たちは祭りに関わっていたし、ムギもその1人だから…。あとの枠が誰を占めるのかは、まだ分かってないわ」
「そっかぁ…。でも、貴重な情報ありがとね。今回はいくら？　その情報」
「お代はいいわ。私が興味本位で調べたことを言っただけだし」
「そっか…。ありがとね」
唯はとびきりの笑顔を振りまき、Ｎ．Ｍ．　Ｆａｒｍを後にした。

「よかったんですか？」
「何が？」
「あんな貴重な情報漏らしちゃって」
「唯と憂は仮にも裏社会のドンよ。こんな滅多に手に入らない情報を提供しなかったら、今度は私が食い殺されちゃうわ」
「なるほど…」
純は和が飲み終えたコーヒーカップを下げると、軽食に、とパンケーキを差し出した。純はコーヒーカップを片付けに、ダイニングキッチンへ向かった。
「本当に純ちゃんはいろいろやってくれるわね」
「私の忠実な駒……」

## #4　「アミックの力、紬の心配」

あの夜の出来事は、秋山　澪が運営する『アミック』にも話題として取り上げられた。

［眠れる二頭獅子現る！　今世紀最大の祭りか？！］

こう題された記事には、それはもう大量の書き込みやコメントが寄せられた。もっとやれとはやし立てるもの、その争いを嘲笑うもの、そしてその争い自体の存在を認めないもの…。しかしそういった書き込みの中で、ひときわ目だったコメントがあった。秋山　澪本人も、そのコメントに目を向けなかったわけではなかった。

［七賢人が動き出したか……］

七賢人…。祭りが起こる前からはやし立てられていた、桜ヶ丘の秩序を守る存在。表世界であっても裏世界であっても、桜ヶ丘の秩序を守るという意味ではどちらも同じ。

少なくとも、私が属しているのは表世界の方である。だが、七賢人の詳しい内容までは把握していなかった。把握しているのは、私が七賢人の1人であり、その中でも唯一のネットスパイであるということ。

そう、その名も『ファイバースパイ』。しかしコメントや書き込みを見ていくうちに、その詳しい七賢人の情報を手に得ることができた。

まず、眠れる二頭獅子。敵に立ち向かう姿は、獅子の姿そのもの。2人でいつも一緒に行動し、狙った獲物は決して逃がさず、捉えたあとはハイエナよりもしつこく骨をしゃぶる。いわば、狙われたら

終わり、というやつだ。裏世界、族世界、そして任侠世界のドン。
そして、惑いの青蝶。中学1年の時に、レディース『恩那組』の総長に就任。中学3年で卒業するまでの2年間で、関東全域をまとめ上げたという伝説のレディース総長。その華麗な戦いの数々は、その名のとおり、敵を惑わす可憐な蝶を思い浮かばらせるとか。
つぎに企業の統率者。マネージャーと言うだけあって、ここ日本国内だけにはとどまらず、世界の3／4を掌握する琴吹コーポレーションの社長令嬢。その鋭い勘と実力で、様々な子会社を成功に導いてきた。眠れる二頭獅子が裏世界のドンなら、企業の統率者は表世界のドンだ。
そして、汚物の清掃人。その名のとおり、世の中にはびこる『汚物』を掃除する者。その発勁を使った巧みな武術は、八極拳と酔拳を組み合わせた独特のもの。
最後に、黄眼の忍び屋。七賢人のなかで最も情報が少なく、存在自体も危ぶまれている。聞いたところによれば、敵の知らぬところで情報を集め、それを武器に敵を貶めるということをするらしい。まるで忍者だ。

最近、七賢人がまた静かに動き始めたようである、というような記事の更新を目にしたが、私は関心を持たなかった。七間人に興味え思っていたことは事実だし、関心をもっていたことも事実。けれどもこんな情報を手に入れたところで有用性があるとも思えないし、私の期待するようなことにはならないと思っていた。つまり、私に得なことは何もない。そう。なにも――――。

◇―◇―◇

先ほど紬は、斎藤から冷や汗のでる噂をきいた。

［先ほど断った製品を作った会社の親が、山中組である］

私の頭の中に、嫌な記憶が蘇る。そう、あの夜の記憶。あの祭りの記憶――。

あの日も私は会議を控えていた。○△社の開発した新商品を、琴吹コーポレーションに採用して欲しいということだった。しかし何のメリットも思い浮かばなかったし、琴吹コーポレーションにはなんの利益も無いという考えの下、採用を断固拒否した。

その後しばらくして、琴吹コーポレーションの子会社であるＨｉｒａｓａｗａ　Ｓｙｓｔｅｍ　Ｃｏｍｐａｎｙから、紬が狙われているので、警備を強化して欲しいと連絡が入った。紬は意味が分からなかった。なぜ私が狙われているのか、誰が狙っているのか、そして、琴吹コーポレーションの警備を強化する理由とは…。

しかししばらくしても琴吹コーポレーションには襲撃がないため、紬は敷地内の警備を通常に戻した。すると、それを待ってましたと言わんばかりにある土曜日の夜、山中組は琴吹コーポレーションを襲撃した。この旨を平沢組に伝えたところ、いくら大会社でもこちらの許可なく警備を緩めたことについて叱責、しかしまたその一方で助太刀する旨を明かした。結局平沢組の介入で事件は解決したものの、あまりにも大きい出来事だったためマスメディアには最高の餌となった。

幸い平沢組は、表世界でも好印象であり庶民的であることから琴吹コーポレーションへのお咎めはなかったが、山中組へのバッシングは強まるばかりでその後山中組は活動を停止していたのだ。

しかしその山中組が活動を再開したというのを、先程の斎藤の発言と同時に聞かされた。今のところ平沢組からはなんの連絡もないが、斎藤の独断で琴吹コーポレーションの警備を強化することを決定、敷地内の全アーケードを閉鎖し、外界との接触はもちろんマスメディアとの接触も避けるようだ。また同様のお祭り騒ぎになって

しまうのか。そう考えると悪寒を走らせずにはいられなかった。

## #5　「黄眼の忍び屋とは」

「――ということだ。本日の総会はこれまで！　解散！！」
「うっす！！」
わらわらと、境内に集合していた恩那組の輩が散り散りになる。すると、
「やってるねぇ、青蝶さん」
と、どこからか柔らかな声がする。律は警戒し、姿勢を構えた。だが、そう言って顔を出したのは敵ではなかった。
「唯…！」
「お姉ちゃんだけじゃありませんよ」
「憂ちゃんまで！」
七賢人の1人、いや、2人である眠れる二頭獅子、平沢姉妹であった。
「え？　惑いの青蝶って律さんのことだったの？」
「そうだよ。りっちゃんが総長になるって言い出す前に、喧嘩を教えたんだ」
「そうだったんだぁ…」
憂は思わず唯を尊敬の目で見た。唯をはなから尊敬していないのではない。喧嘩の実力は確かだし、憂とまともに対峙（たいじ）すれば圧倒されるほどのオーラと力をもっているからだ。ただ、唯は教えることがあまりうまくはなかったのだ。その唯が律に喧嘩を教えていたとなると、尊敬の目で見ることしかできない。
「……どうしたんだよ」
律は、憂から唯に視線を移す。
「七賢人が動き始めたっていう情報を手に入れてね。ちょっと見回ってるんだよ」
「お前も七賢人のうちの1人だろ？　人のこと言えるのか？」
「あれ、りっちゃん知ってたの？」

「知ってるも何も、祭りの関係者だろ」
「ありゃ、バレてたか」
唯は頭をポリポリとかいた。
「バレない方がおかしいよ。あれだけの騒動起こしといて」
「それもそうだね」
含み笑いをする唯。その表情が学校にいるときの唯と違って大人っぽく見え、柄にもなく律は唯に惚れてしまいそうだった。
「で、今回は何の用だよ。二頭獅子さん」
「大したことじゃないんだけど、さっきも言ったように七賢人が動き出してるんだよ。私たちも今七賢人が誰かを突き止めてる途中なんだけどね、全然わからないんだ。りっちゃん、何か知ってる？」
「…残念ながら私も良くわからないんだよ」
そう言って少し間を置いたあと、律が唯の耳元で続ける。
「最近うちの下のもんが次々やられててな」
「下？」
「あぁ。うちは階級制になってて、上から総長・副総長・幹部・幹事・舎弟頭・舎弟ってなってるんだ。まぁうちの組の場合、副総長2人、幹部5人、幹事15人、舎弟頭3人というなんだが、このうち幹部までが中枢部といって、恩那組の核だ。最近は舎弟頭を含む舎弟たちが次々やられててな。こっちも困ってるんだよ……」
「誰がそんなことやってるの？」
「それが見当がつかないんだ……ただ」
「ただ？」
「うちの舎弟が聞いたそうだ。その名を」
「何とおっしゃってたんですか？」
「『我は黄眼の忍び屋也。直ちに恩那組を解散せよ』とだけ……」
「！！」
唯と憂は顔を見合わせ、ハッとした表情をした。
「黄眼の忍び屋って…」
「そう、紛れもない七賢人のひとりだ。だが顔もわからないし、う

ちのものに手を出す理由もわからない」
「どうして？　手を出す理由がわからないのは見当つくけど、顔くらいは見れるでしょ？」
唯の疑問は最もだ。一方的にやられている以上、手を出す理由が恩那組には見当もつかない。ただ、顔は夜でもない限り見られたはずである。
「それが、仮面というか、覆面をしててだな…。あんまりわからないんだよ」
「りっちゃんの考える、恩那組が襲われる理由は？」
「それもわからない。私らの情報をどっから得たのかもわからないし、謎が多過ぎるんだ…」
「さすが忍び屋だね」
「それだけじゃない。奴は、ここまでやっておいてまだ忠告だと抜かしてるんだ」
「りっちゃんは、憎い？」
「……何を？」
「黄眼の忍び屋」
「……あぁ、憎い。憎いよ。恩那組はただの不良の集まりじゃない」
静かに答える。その表情はまるで、獲物を仕留める前の虎のようだった。
「不良というレッテルを貼られたがゆえ、行き場所をなくした子猫の家なんだ。そして私が…その猫たちの飼い主なんだ――」
「そっか……憂」
「何？　お姉ちゃん」
「これからやることが決まったよ…。黄眼の忍び屋の正体を暴く」
「暴いて…どうするの？」
「まずは暴くだけだよ。どれだけ足掻いても、相手は私たちと同じ七賢人。下手に手出しは出来ない」
「私も協力する！」

「りっちゃんはいつも通りでいいよ」
「でも！」
「りっちゃんは飼い主なんでしょ？　だったら迷える仔猫ちゃんの世話はちゃんとやらなきゃ」
「でも…でも……」
「大丈夫。私たちに任せて私たちは二頭獅子なんだよ？　狙った獲物は逃がさない…」
そう言った唯の表情を見て、律は背筋を凍らさずには居られなかった。学校で見せるいつもの唯の表情ではなかった上、不敵な笑みを浮かべていたのだ。
「だから……ね？」
「…分かった」
律は静かに引き下がった。
「ふふ…いい子」
そう言うと、唯と憂は静かにその場を去った。律はただただ、その似通った姉妹の背中を見送ることしかできなかった。

## ＃6　「獅子と青蝶の出会い」（前書き）

この部分は律視点で進んでいます。なので1人称が『私』となっていますが、ご了承ください。

## #6　「獅子と青蝶の出会い」

眠れる二頭獅子、もとい平沢姉妹には、数え切れないほどお世話になった。特に姉の平沢　唯は、私の師匠であると言っても過言ではない。

唯と出会ったのは、中学1年生の時だった。私は小さい頃から溌剌とした性格で、友達もすぐできる方だった。しかし一部の人間はそれを良く思わなかったらしく、私のその性格が種となって、悪い影響を与えていたようだった。次第にやかましいとか、煩わしいとか、無神経だとかいう風に言われるようになって、最終的にはそれがいじめという形に表れた。

いじめは最初、ノートを破られるとか、上履きを隠されるとかだった。これは私の中では、いじめではなく『嫌がらせ』であった。だからあまり気にしていなかった。

しかしその“嫌がらせ”は例のごとくエスカレートし、私の精神は極限まで追い込まれた。何件も精神科を回った。そしたら一緒に行動していた澪にもいじめの流れ弾は回り込み、澪の心にも深い傷を負わせてしまった。私は深く悩んだ。澪を守りたい。そんなときに出会ったのが、唯だったのだ。

「どうしたの？　なぜ泣いているの？」

唯とあったとき、私は泣いていた。その日も、いじめられていたから。私は唯に告げた。いじめられているのだ。私のせいで、私の幼馴染もひどい仕打ちを受けている。私はその幼馴染を守りたい。だから、私は強くなりたいのだ、と。すると唯は、一言私にこう告げた。

「じゃぁさ、ケンカ…しよう？」

私は訳が分からなかった。なぜケンカなのか、と。当時の私が思いつくケンカは、口喧嘩とか兄弟喧嘩とかそういう内輪でもめるときの喧嘩かと思っていた。けれども、唯の目はそれどころではなかっ

た。
「殴り合いだよ…？」
唯はそう言った。だが私はますます訳が分からない。私は殴り合いなどやったことがないし、当てる自信はあっても、勝てる自信はなかった。顔立ちはすごく優しくて口調もすごく優しくて、だけど何かしら近づきがたいオーラを放っていた。
「大丈夫。当てないから」
唯は言った。私は渋々、その子に従った。そして静かに、向かい合った。
「……いくよ」
静かな声とともに、唯は目にもとまらぬ速さで私の目の前に拳を突き出した。その拳の早いこと、早いこと。時間が経つごとに目は慣れてきたが、体が慣れない。
優しいことに、唯は本当に1発も拳を私に当てなかった。当てなかったけれど、それはもう俊敏以外の何物でもなく、そしてその時の顔は獲物を捉える肉食動物そのものだった。素早かったのはプロボクサーを超える拳だけでなく、足払い、技のよけ方、足技、全てが俊敏、機敏、そして正確だった。私も頑張って反撃はしてみたけれど、まるで相手にはされなかった。唯は上半身だけで私の渾身の反撃をよけている。いくつか唯を見習って、彼女の真似事はしてみたが、やはりうまくいかない。いつしか私は、唯の足払いによって体が泥だらけになった。けれど、なんだか気持ちよかったのだ。清々しかった。
私はあのあと喧嘩の方法を教わり、ここがみぞおちだとかここが急所だとか、体の使い方とか、とにかくいろいろ教わった。そして週に1回は唯と向かい合うようになった。いつまでたっても私の攻撃は当たらないのに、唯の攻撃は目測ではあるが百発百中なのだ。
でも、唯はそれでも私に拳を当てようとはしなかった。ある時唯は、稽古が終わったあとにふと口を開いた。
「私ね、この拳は戦うために使わないって決めてるの」

「どういうこと？」
私が問うと、唯はその柔らかな笑顔を崩さず、ただ一言、つぶやくように言った。
「私のおじいちゃんね、極道なんだよ」
と。驚いた。こんな可愛い女の子が、ヤクザの娘だなんて。唯は続けた。
「私はいつだって、友達は多かった。けど、この事実を知ったとたん私から離れていくんだよ。りっちゃんも、そうなの？」
そんなことない。そう答えたかった。けれども私は、即答できなかった。
「そんなわけ…ないじゃないか……」
私がそういう反応をしたものだから、唯はより一層表情を和らげた。
「やっぱり、どこへ行っても一緒なんだね。仲が良くてもそれは表面上で、中身はそうでもない。蓋を開けてみたら…ってやつだね」
「ち、違う！」
私は必死に反論した。
「何が？」
「そんなこと言ったら、私が唯に喧嘩を教わってる意味がないじゃないか！　唯のおじいちゃんがヤクザとかで引いてたら、私はもうこの場にいないよ！」
「じゃぁ――――」
唯が少しの間黙る。その場に緊張が走った。
「りっちゃんが喧嘩を教わってる理由って、何？」
それは澪を助けたいからに決まってるだろ！　そう言いたかった。しかし、言えなかったのだ。確かに、私自身も強くなりたい。いじめられないほどに。いじめたやつらに仕返しできるように。もちろん澪だって助けたいけど…。そう考えているうちに、わからなくなってしまった。どうして私は喧嘩を教わっているのか。考えれば考えるほどわからなくなる。そういろいろ考えている時だった。
「ぐっ……は…っ」

唯が私のみぞおちに、1発拳を見舞ったのだ。その拳は、確かに深くまで入った。それははじめての拳だった。唯が私にヒットさせたはじめての拳。とても、重かった。

「そんなこともわからないのに、喧嘩なんてしないでよ。結局は自分のためなんじゃないの？」

そう言う唯の顔に、表情は無かった。

「自分が強くなりたい。仕返ししたい……。そういうのが丸見えなんだよ。でもね、喧嘩っていうのは――」

唯は静かに拳を握った。爪が食い込んで、血が滲んでしまうのではないかというくらい、きつく。

「大切な何かを守るためにあるんだよ。傷つけるためじゃなく」

唯はそう言うと、そのまま私の視界から姿を消した。私はその場でお腹を抱えたまま、号泣した。唯には全てお見通しだったのだ。澪を助けたいというのは口実で、本当は自分が強くなりたかったということが。

けれど私は、それでも澪を助けたかった。辛そうにしている澪を見るのは私が耐え難かったから。もちろん、幼馴染として。

それからまた少し時間が経って私は唯に謝った。唯は私の話をずっと聞いてくれて、私が話し終えたときに唯は、

「――やっと帰ってきたね」

としか言わなかった。当時は意味が分からなかったが、今考えてみればわかる気がする。唯はどこまでも、私たちを見守ってくれていたのだ。

唯のおかげで、今の私はある。唯のおかげで、澪は立ち直れて中学校に復帰した。私はレディース『恩那組』を立ち上げ、澪のように困っている子達を匿った。私はそこの総長となって、その子達の親として、責任をもって子供を育てた。今の結果には、後悔していない。

## ＃6　「獅子と青蝶の出会い」（後書き）

書き溜めが少なくなってきたので、おそらく半月ほどは書きための期間になると思います。次の更新まで、今しばらくお待ちくださいませ。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7583x/

Seven Fighters

2011年10月26日03時03分発行